

現代ギリシア語の法の問題

一特に接続法に関して一

浮 田 三 郎

1. はじめに—現代ギリシア語の苦悩

「言語は生きている」と言われるが、現代のギリシアは、まさに、こうした移り変わる言語が大きな社会問題ともなっている近代国家の一つである。現代ギリシアの言語問題は、純正語（カサレヴサ καθαρεύουσα）と民衆語（ディモティキ δημοτική）との闘争を中心に繰り広げられている。

現代ギリシア語の正書法の問題も、そのような中で、色々と議論的となっている。イオタキズモス（ῥωτακισμός）と呼ばれる η, ι, υ, ει, οι, υι 等の母音を全て ι（イオータ）で綴ろうとする傾向（現代ギリシア語では、これらの母音は全て [i] と発音される。その為に、これらを全て ι で綴り、正書法をより易しくする事の方が、η, ι, ει, οι 等の母音が従来持っている意味の特徴を書き表わす事より、より大きな意義があるとする傾向）は、まだ正式には認められていないが、一つの勢力となっている。

また、古典ギリシア語や純正語の正書法では固く守られてきた接続法や希求法等に於ける η-ει, ω-ο, ω-ω, ρ-α 等々の区別は、もはや民衆語では正書されなくなりつつある。純正語と民衆語の闘争では、近年漸く、民衆語を公用語として使用し得る（従来、国会、法廷等の場では、民衆語は使用されず、純正語のみが使用を許されていて、多くの民衆は自分の口で物を言うことが出来なかった）ことになった。この事は、又様々な社会言語学的問題を引き起さざるを得なかったが、現代ギリシア語の統一と言う面では、民衆を主体にした統一体制に一步近ずいた感のする昨今である。因に、国内のほとんどの新聞雑誌は、民衆語で書かれ、その上、氣息記号（ῆ δασεία）、無氣息記号（ῆ ψιλή）、アクセント気号（ῆ ὀξεῖα, ῆ βαρεῖα, ῆ περισπωμένη の三種）も、全て同一記号に簡略化され始めた。これは、行き過ぎだと言う声も大きい。

2 現代ギリシア語の法

現代ギリシア語の動詞の法の立て方は、文法家によっても様々であるが、ジャルジャンス（A.A. Τζαρτζάνος）氏は、形態論的な面からは、基本的には、直説法、命令法、接続法の三つしかない。例えば、γράφω「書く」の単数2人称のアオリスト形は：ἔγραψες（直説法）— γράψε（命令法）— ἄν γρά-

ψης (γράφεις) (接続法)が、統辞論的かつ意味論的に見ると、五つの法を設定することが出来ると主張している (cf. A. A. Τζαρτζάνου - Νεοελληνικὴ Σύνταξις)。即ち彼は、特に意味論的な面からは、(i)主直説法、(ii)可能直説法、(iii)命令法、(iv)意志的接続法、(v)希求法の如く五つに分けている。一方関本至氏は、形態論的な立場から、(1)直説法と(2)命令法を基本的な法として、(3)接続法、(4)条件法、(5)希求法の三つを派生的な法として設定している (cf. 関本至 - M. G. G.)。この接続法を基本的な法の範疇に設定するか否かについては、また議論の有所である (cf. Τζαρ. Ν.Σ. § 187. 注)。これらの派生的法とは、νά, ἄς, θά 等々の小辞と諸動詞形との組み合わせによる構文であり、その事からこれらの法は、形態論的に現代ギリシア語の動詞の法としては認められないと主張する文法家も少なくない。

ところで、上記の両者の法の分け方を比較してみると、(4)条件法は即ち(ii)可能直説法と同じであり、基本的には直説法と見なすことも出来る。例えば、

θὰ πέθαινε καλύτερα παρὰ νάνοίξη τὸ στόμα του νὰ ζηρήρη δανεικά. (Ζ.Π. 146.)

「彼は、口を開いて借金を懇うより死んだ方がましだろうよ。」

—①

の θὰ πέθαινε は、小辞 θά と直説法の未完了形 πέθαινε との組み合わせ構文である。この様に条件法は、一般的には、小辞 θά と動詞の直説法の過去形 (継続態・瞬時態) との組み合わせで形成されている。

又、希求法と呼ばれる叙法も議論のある所であるが、この一般的な形は、小辞 ἄς, νά あるいは, μακάρι νά, εἴθε νά 等の語句と動詞の直説法の現在形, 過去形 (継続態・瞬時態), 接続法 (あるいは瞬時未来形から θά を取り除いた形—後述) との組み合わせ構文であり、νά 構文, ἄς 構文等に於いては、接続法の構文と全く同じ場合もあり、これらに分けるには、文の意味、脈らくによる以外に方法が無い (これは、又、接続法を基本的に認めるか否かによっても、分け方は違ってくるであろう)。例えば、

Ὁ θεὸς ἄς τοῦ δίνῃ ὑγεία καὶ ἄς παίρνῃ μέρες ἀπὸ μένα νὰ τοῦ δίνῃ χρόνια. (Τρ. 259)

「神が彼に健康を与え、彼に歳月を与えんために、私から日々を奪いたまえ。」

—②

の場合、δίνῃ を接続法として認めるなら、ἄς の附加による接続法から派生される構文的希求法であり、又、δίνῃ (δίνει と同正書され、これは、直説法現在形でもある) 単独では接続法と認めず、接続法を形成するには、必ず νά が必要であると言う考えに立つなら、ἄς δίνῃ は ἄς 構文による希求法であり、νά 構文の接続法と同じレベルで分けることが出来る。又、次の様な例

Τώρα φιληθήκαμε σκλάβοι· νὰ ξαναφιληθοῦμε ἐλεύθεροι. (Μπ. 26)

「私達は、今、奴隷として口づけし合ったが、自由に、もう一度口づけし合いたいものですね。」

—③

では、ジャルジャンス氏は、この νά 構文の ξαναφιληθοῦμε は願望を表す時に用いられる接続法アオリスト形と認め、意味論的には、μακάρι νά ξαναφιληθοῦμε と置き換えられることが出来るとし、希求法の範疇に入れている。

次の様な例では、*ἄς, νά, ἔιθε, νά* 等々の構文的希求法が、明らかに区別されるであろう。

Θεέ μου, κί' ἄς τὸν εὐρισκα τὸν Κωνσταντῇ στὸ δρόμο. (A.A. 604.)

「神よ、途中でコスタンデイスを（私が）見つけますように。」

—④

Ἄς ἤξερα γράμματα κί' ἄς ἤμουνα μ' ἕνα μάτι. (Τδαρ. 287)

「文字を知っていたらなあ、片眼であってでもいいんだが」

—⑤

Ἀχ. νὰ μποροῦσα ἐγὼ νὰ γίνω ἡ νύφη. (Καζαντζ. Ἀθολ. 115.)

「ああ. 私か花嫁さんになれたらなあ」

—⑥

Νά 'σουν ἐσὺ ποὺ θά 'φερνες τὴν ξεχασμένη αὐγή. (Σεφέρ. 24.)

「忘れられた夜明けをもたらすのが、あなたならなあ。」

—⑦

Μακάρι νὰ μ' ἔβγανες. (MB. 506.)

「私を外に出してくれたらなあ（君が）。」

—⑧

Περπατήσαμε πολύ; Ἄς περπατήσαμε τὸ πολὺ δυὸ ὥρες. (Τζαρ. § 190. 285.)

「私達は随分と歩いたね? 多くて、二時間歩いたろうね。」

—⑨

④～⑧の *νά* 構文等に現れる動詞形は、直説法未完了形、⑨の場合は直説法アオリスト形（過去瞬時態）であり、直説法から派生された構文的希求法である。⑤の様な一対になった表現は、強い心情を表現している。

3. 現代ギリシア語の接続法

3.1. 現在時称の場合

2でも少し言及したが、現代ギリシア語の接続法は、その存在が認められるのだろうか。もしそうなら、如何なるものか。例文などを掲げながら、少し考察してみよう。

先に1でも述べた様に、正書法に於ける η と $\epsilon\iota$ (η と $\epsilon\iota$), ω と $ο$ 等々の区別は、発話に於いてはすでに早くから、無くなっていた (cf. D.W. Lightfoot, *Principles of Diachronic Syntax*. 1979. "Dionysios Thrax in the second century B.C. testifies that *iotas* of the long diphthongs were not pronounced, and Allen observes that confusion between \bar{e} and i in Attic inscriptions begins around 150 A.D.").

例えば、現代ギリシア語の条件文に於いて、

$\alpha\nu$ ἔχης ④ 「もし君が持っているなら」

$\alpha\nu$ ἔχεις ⑤ 「同上」

と正書された場合、正書法からは④は接続法、⑤は直説法と言えるであろうが、現在もはや④も⑤も音韻的には全く同じ (η も $\epsilon\iota$ も $[i]$ と発音される) であり、現在は④も又、ディモティキ (民衆語) では、ほとんどの場合 $\alpha\nu$ ἔχεις と正書される。現実には、話者あるいは聞き手は、発話時にはたしてこの区別をしているであろうか。又、今から現代ギリシア語を学ぶギリシア人達の間で、上記の様

な場合、接続法の存在が認められるであろうか。又、その必要があろうか。

この様な音韻そして正書法の変化により、現代ギリシア語にはもはや接続法は存在しなくなった様にも思われる。例えば、次に直説法と接続法の現在継続態を対比してみると：（動詞 διαβάζω「読む、勉強する」の例）

現 在 継 続 態	
直 説 法	接 続 法
単数1人称 διαβάζω	νά διαβάζω
" 2 " διαβάζεις	νά διαβάζεις ^{※1} (-ης)
" 3 " διαβάζει	νά διαβάζει ^{※2} (-η)
複数1 " διαβάζουμε ^{※3} (-ομε)	νά διαβάζουμε ^{※4} (-ωμε)
" 2 " διαβάχετε	νά διαβάχετε
" 3 " διαβάζουν	νά διαβάζουν

注1. ※1.νά διαβάζης, ※2.νά διαβάζη, ※3.διαβάζομε, ※4.νά διαβάζωμε
とも正書されるが、現今のディモティキでは稀である。

注2. ※1と※2のηはειと同じ発音〔i〕, ※3と※4のοとωも同じ発音〔o〕である。

注3. 現在継続態では、中・受動相の活用においてもこれと同様に、直説法の動詞変化形に小辞 νά を附加して接続法の形が作られる。例えば、στολίζομαι「私は服を着る」、στολίζεσαι, στολίζεται, στολίζομαστε, etcのνά 構文の接続法は, νά στολίζομαι, νά στολίζεσαι, νά στολίζεται, νά στολίζομαστε, etc である。

この例で見られる様に、接続法現在継続態とここで呼ばれているものは、直説法現在継続態に小辞 νά を附加したものに過ぎず、形態論的には接続法は、ディモティキにはもはや存在しないと主張されることになるのもうなずける様に思われる。確かに、少なくとも接続法現在継続態の用法は、現今、ディモティキでは、νά 構文(ΰς 構文等)による以外に無くなった。

3.2. アオリスト形の場合

ところが、A. ジャルジャンス氏は、アオリスト形に於ける例証で、接続法も形態論的に基本的に認められると主張する(cf. A. Τζαρ. Ν.Σ.). 例えば、次にアオリスト形の変化を⑩の如く対比してみよう。

ア オ リ ス ト 形 (瞬 時 態)	
直説法(過去)	接 続 法
※1 単数1人称 διάβασα	νά διαβάσω
" 2 " διάβασες	νά διαβάσεις ^{※2} (-ης)
" 3 " διάβασε	νά διαβάσει ^{※3} (-η)
複数1 " διαβάσαμε	νά διαβάσωμε ^{※4} (-ωμε)

複数 2 人称	διαβάσατε	νά διαβάσετε	
〃 3 〃	διάβασαν	νά διαβάσουν	—⑪

注 1. ※ 直説法アオリスト形（瞬時過去）の場合，語頭にオーグメント（母音 ε̣-）が附加される場合があるが，ディモティキでは，オーグメントにアクセントのない場合は，ほとんど附加されない。

注 2. ※ 2. νά διαβάσης, ※ 3. νά διαβάση, ※ 4. νά διαβάσωμεとも正書される（⑩の注 1, 2 参照）。

注 3. アオリスト語幹は一般的には，現在語幹に -σ-（シグマ）をつけて作るが，そうでない場合もある。接続法アオリスト形の語尾変化は，直説法現在形のそれと同じである。（cf. 関本・M.G.G.）。

注 4. 中・受動相の場合，アオリスト形，

	直説法（過去）	接 続 法
単数 1 人称	στολίστηκεα	νά στολιστῶ
〃 2 〃	στολίστηκες	νά στολιστεῖς
〃 3 〃	στολίστηκε	νά στολιστεῖ
複数 1 〃	στολιστήκαμε	νά στολιστοῦμε
〃 2 〃	στολιστήκατε	νά στολιστεῖτε
〃 3 〃	στολίστηκαν	νά στολιστοῦν

注 5. 中・受動相のアオリスト語幹の特徴は，直説法が -θηκ-, 接続法が -θ- であるが，上表のように σ + θ はディモティキでは，στ になる。

上表の如く，あくまでも，νά 構文が原則とされているが，διάβασα（-ες, -ε, etc）と（νά）διαβάσω（-εις, -ει, etc）の対立は，形態論的にも明白である（注 4 の中・受動相の場合も同様）。

又，次の様な条件文では，

ἄν διάβασε 「もし彼が勉強したなら」 —⑫

ἄν διαβάσει（-η） 「 〃 するなら」 —⑬

の如く，διαβάσει（⑬）は，νά 無しで，単独でも使用され，διάβασε（直説法アオリスト形）と διαβάσει は対立している。語尾の -ει は，直説法現在形の語尾変化と同じで，現今ではほとんど -η 等では正書されず，正書法に於ける接続法的色彩が薄れていると言えそうである。

4. 接続法と νά 構文と θά 構文

ところで，⑬の διαβάσει のような形が，接続法アオリスト形と認められるか否かについて，ミランベル（A. Mirambel）氏は，もはや，接続法ではなくて，未来形のまがいものである，と論述している（cf. A. Mirambel, *Négation et Mode en Grec Moderne*）。確かに，⑬の意味は，単純に未来起

くるであろうことを仮定しており、あるいは、 $\alpha\upsilon\theta\acute{\alpha}\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ （未来形の仮定表現）からの派生とも考えられる。D. W. Lightfoot 氏も、Hahn 女史の主張を引用しながら、‘the subjunctive is clearly some kind of future tense’（cf. D. W. Lightfoot, P. D. C. P.284.）と言及しており、⑬の場合、従来の接続法の位置を未来形が取って変わったとも言えそうである。がそうであろうか。⑬の例中の $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ （-η）を単独で、接続法と認めるか、あるいは、直説法未来形のまがいものとして扱うかで、また直説法未来形の説明の仕方も違って来るであろう。

次に、⑬と比較しつつ、 $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\zeta\omega$ のアオリスト形（瞬時形）を分析してみると、

$\alpha\upsilon\delta\iota\acute{\alpha}\beta\alpha\sigma\epsilon$ （現在の事実に反する仮定） —⑫

$\alpha\upsilon\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ （単純な未来の仮定） —⑬

$\theta\acute{\alpha}\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「彼は勉強するでしょう。」（単純な未来形 — $\theta\acute{\alpha}$ 構文） —⑭

$\nu\acute{\alpha}\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「彼は勉強しなくては（いけない。）」（義務、願望等を表わす — $\nu\acute{\alpha}$ 構文） —⑮

⑭は、直説法未来瞬時態であり、未来形はこの様に一般的には、 $\theta\acute{\alpha}$ 構文で表わされる。⑮は、今まで見て来た様に、 $\nu\acute{\alpha}$ 構文による接続法瞬時態と言うことになる。

とすると、⑬の $\alpha\upsilon$ 構文に於ける動詞形は如何なる法であろうか。⑬～⑮の三例とも動詞形は同じである。⑬の $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ を未来形のまがいものとしてとらえるなら、⑭⑮の動詞形も同形でなくてはならないだろう。あるいは、それを接続法と認めても同様である。ともかく、この動詞形が未来時称と関係していることは想像出来る。ちなみに、未来を示す $\theta\acute{\alpha}$ 構文に於ける動詞の変化形は、能動相でも、中・受動相でもそれぞれ $\nu\acute{\alpha}$ 構文に於けるそれと同じである。ところで、今、⑭⑮を条件文にしてみると、

$\alpha\upsilon\theta\acute{\alpha}\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「彼が勉強するなら」（単純な未来の仮定） —⑯

(?) $\alpha\upsilon\nu\acute{\alpha}\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「彼が勉強しなくてはならないならば」（⑮の仮定） —⑰

となり、⑯は未来の条件文で可能であるが、⑰のような表現は、現実にはおかしい文である。 $\nu\acute{\alpha}$ 構文をひとまとまりの単なる接続法とするならば、⑮も⑬と同意の接続法の条件文として可能なはずである。

もし、 $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ を接続法と仮定すれば、⑯は $\alpha\upsilon + \theta\acute{\alpha}$ + 接続法で、 $\theta\acute{\alpha}$ + 接続法をひとまとまりの未来形とおけば、⑯は可能で現実と一致する。⑰は、 $\alpha\upsilon + \nu\acute{\alpha}$ + 接続法となり、小辞 $\nu\acute{\alpha}$ が浮き上がり、おかしい文になる（ただ、 $\nu\acute{\alpha}$ 構文の⑮の意味の文の仮定という事で、表現可能かも知れない）。従って、 $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ = 接続法と仮定すると現実の上記の表現の説明がうまく出来る。又、⑮あるいは後述の例でも見られる様に $\nu\acute{\alpha}$ 構文の小辞 $\nu\acute{\alpha}$ は、今や叙法（特に接続法）を形成する時に使用される単なる機能辞と言うよりも、まだ接続詞的な意味をもつ小辞（ $\nu\acute{\alpha}$ は、古典ギリシア語の目的等を示す接続詞 $\epsilon\iota\varsigma$ からの派生であり、 $\epsilon\iota\varsigma$ と同様な使い方がされる場合もある。）の印象を与える。従って、多くの場合、接続法の用法にはこの小辞 $\nu\acute{\alpha}$ が必要であるが、その他の接続法と結合する文構成要素の後では、その存在の必要性が無くなると言える。それに比べて、 $\theta\acute{\alpha}$ 構文の未来形の場合、小辞 $\theta\acute{\alpha}$ は未来時称を示す動詞形の必要成分であり、小辞 $\theta\acute{\alpha}$ が無ければ基本的に未来形は形成されず未来時称は表わせない

い($\theta\acute{\alpha}$ は、動詞 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\omega$ 「望む」+ $\nu\acute{\alpha}$ からの派生であるが、今やその意味は無くなり、未来形や他の意味論的な叙法を作る機能辞として用いられる)。即ち、ここで述べた $\nu\acute{\alpha}$ 構文と $\theta\acute{\alpha}$ 構文を、同じレベルで考える事は危険である。

歴史的にも、条件の $\alpha\upsilon$ 等の接続詞に続く単純な未来を示す動詞形に接続法も使用されていた事を考慮すれば、 $\alpha\upsilon$ 構文に於ける未来を示す接続法が生き残り、その動詞形が逆に、 $\theta\acute{\alpha}$ 構文の直説法未来形を形成するのに一役買うようになったと考えていいかも知れない。

同様に、 $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ 「多分」に先行されるアオリストの動詞形は次の如くで、

$\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「多分彼は勉強するでしょう」(単なる未来の予想) —18

前述の場合と同様 $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ は接続法とみなすのが妥当であろうか。次の例を見ると、

$\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\theta\acute{\alpha}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「18とほぼ同意」(単なる未来の予想) —19

$\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\delta\acute{\epsilon}$ $\theta\acute{\alpha}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「多分彼は勉強しないでしょう」(同上) —20

$\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\delta\acute{\epsilon}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「20とほぼ同意」(同上) —21

(?) $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\nu\acute{\alpha}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「多分、彼は勉強しなくてはいいけない。した方が良い」

(勧奨, 義務, 願望等) —22

(?) $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\nu\acute{\alpha}$ $\mu\acute{\eta}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 「多分、彼は勉強すべきじゃない。等々」(禁止, 義務等) —23

(X) $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ $\mu\acute{\eta}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ —24

19は18よりも未来の出来事をより強く表現しているが、18とほぼ同意で、20は19の否定。21は18の否定。19・20は直説法未来アオリスト形。この様に18~21は意味論的にも構文的にも深い関係があるが、 $\nu\acute{\alpha}$ 構文の22は18とは意味も構文的にも大きな違いがある。23は22の否定であるが、両者ともにおかしな表現である。24は表現不可能。18の否定でもないし、23からも派生出来ない。

構文的には、18は $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ と動詞の意味的な関係により構成された構文であり、 $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ が無ければ、 $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ 単独では意味を成さず、 $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ がこの場合、接続法アオリスト形の構成要素の一部とも感じられる。21も同様。一方、22の場合は、 $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ を取り除いても $\nu\acute{\alpha}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ は $\nu\acute{\alpha}$ 構文による接続法アオリスト形の文として意味を持ち、 $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ は単に $\nu\acute{\alpha}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ を修飾しているに過ぎない。23も同様。19は22と構文的には似ているが、 $\gamma\acute{\iota}\sigma\omega\varsigma$ と $\theta\acute{\alpha}$ $\delta\iota\alpha\beta\acute{\alpha}\sigma\epsilon\iota$ のかわり合いにおいて、意味的に大きな違いがある。20も同様。従って、18・21は接続法とみなすのが妥当であろう。

しかしながら、この様に、単独の動詞形のみによる接続法の用法は、少々古臭い表現を含めて限られたものでしかない。以下、少しばかりの例文を掲げる。

$\Delta\acute{\epsilon}$ $\sigma\acute{\epsilon}$ $\varphi\alpha\beta\omicron\upsilon\mu\alpha\iota$, $\kappa\upsilon\theta\rho$ $\text{Βοριά,} \varphi\upsilon\sigma\acute{\eta}\sigma\eta\varsigma$ $\delta\acute{\epsilon}$ $\varphi\upsilon\sigma\acute{\eta}\sigma\eta\varsigma$. (E. 88.8)

「あなたなんか恐くありませんよ、北風さん、吹いても吹かなくてもね。」 —25

$\text{Ζήση} \pi\epsilon\theta\acute{\alpha}\nu\eta\iota$, $\delta\acute{\epsilon}\nu$ $\tau\omicron\upsilon\varsigma$ $\nu\omicron\iota\acute{\alpha}\zeta\epsilon\iota$. (Tζαρ. 300)

「彼が生きようと死のうと、彼らにとっては問題ではない。」 —26

これらは、反対の表現が一對になって構成された条件文の一種であろうか。25は否定表現で、又26は反

対の意味を持つ単語で、それぞれ一対の対句的な表現を構成している。基本的には、②⑤は、εἴτε …… εἴτε …「……なら(でも)……なら(でも)」,あるいはκεῖ'αὖν …κεῖ'αὖν …「……でも……でも」等の略された形と考えられる。また、これとよく似た表現で、古くからの慣用句となっている次の例も参照。

ὅπου φύγη φύγη 「一目散に」 —②⑦

τὸν ἔχει μὴ στάξῃ καὶ μὴ βρέξῃ.

「〔彼女は〕目に入れても痛くない程、彼をかわいがっている。」 —②⑧

ところが、これらの例は、②⑤②⑧の例とは、意味的にも構文的にも、違っている。直訳すれば、②⑦は「逃れりや逃れる所なら」、②⑧は、「しづくにも雨にも濡ないように」とでも訳されるであろうか。前に見たような単純に未来の假定、想定を表わしたものではなく、方法あるいは目的を表わす時の接続法と考えられる。従って、あるいは、次の如く、νᾶ 構文で書き換えられるであろう。

ὅπου νᾶ φύγη νᾶ φύγη —②⑦'

(γὰρ) νᾶ μὴ στάξῃ καὶ νᾶ μὴ βρέξῃ —②⑧'

従って、②⑧の否定詞がδένではなくμὴであり、一見前述の②①や②⑤の例に矛盾する様に見えるのが、簡単に解明されるであろう(cf. 5)。

5. νᾶ 構文と否定辞 μὴ(ν)

前述の否定辞の選択(δένかμὴνか)には、又議論のある所であるが、これを決定するのは、νᾶ 構文の小辞νᾶではなかろうか。即ち、表層構造にはνᾶが存在しなくても、文生成段階のある時機にνᾶ 構文が現われ、その段階で否定辞が選択される場合は、必ずμὴ(ν)が選択される。

否定辞の選択について、ジャルジャンス氏は、大原則として、(i)事実と現実の叙法(主直説法)、(ii)想像と可能の叙法(可能直説法)(単純に未来の事を想像したり假定したりする場合の接続法も含めて)は断定文の叙法であり、否定詞はδέ(ν)、(iii)命令の叙法(命令法)、(iv)希望と意志の叙法(意志の接続法)、(v)願望の叙法(希求法)は、希願文の叙法であり、否定詞はμὴ(ν)である(Tζαρ. N.Σ. §201)と意味論的な面から説明している。ミランベル氏もまた、法と否定詞に関して、興味ある論述をしている(cf. Mirambel, Négation et Mode…)

上述の(iii)の(命令法)の所は、意味論的な見方であり、形態論的な命令法は否定詞の付く禁止命令文を持たない。禁止命令には、従って、νᾶ 構文の接続法が用いられる。ところで、次の文

μὴ διαβάσεις(-ης) 「読むな」 —②⑨

は、命令法の代用として用いられる禁止を表わす接続法の表現であるが、基本的には、νᾶ 構文であり、表層構造からは、小辞νᾶが落ちている表現と解してよかろう。禁止を表わす接続法は、元来はνᾶ 構文で表現されるが、否定詞μὴ(ν)はνᾶ 構文あるいは接続法と深い関係があると考えられ、多くの場合νᾶは省略される。従って②⑨は、次の文

νᾶ μὴ διαβάσεις(-ης) —②⑨'

と同じ意味である。

ところで、先に見た、*νά, ἄς, εἴθε* *νά*等々に導かれる形態論的には、直説法であるが、意味論的、統辞論的には希求法と呼べる叙法の場合は、どの様に考えたらよいのであろうか。

Ἄς μὲν τοὺς πείραζες, νὰ μὲν σὲ πειράζουιν κί' αὐτοί. (Τζαρ. 285)

「彼らにいたずらすることなかれ、彼らもあなたにいたずらしないようにね」 —⑩

Δὲν ἤθελα τὸ θρόνο· ἄς μὴ μὲ στήριξε. (Βυ. 18)

「私は玉座は望まなかった。願わくは、彼が私を支持しなければなあ。」 —⑪

Προδότης! ποὺ νὰ μὲν εἶχε κλήρα. (Πα. 137)

「裏切り者!後継なんか持たなければいいが。」 —⑫

Παρασκευὴ ξημέρωσε, ποτὲ νὰ μὴ εἶχε φέξει. (Ε. 49)

「金曜日が明けた、本当に夜が明けなけりゃよかったのに。」 —⑬

これらの例文に見られる *ἄς* 構文、*νά* 構文の否定辞は、全て *μὴ(ν)* である。この否定辞決定は、この章の最初に述べた統辞論的决定によれば、簡単に選択される。この場合、*ἄς* 構文の小辞 *ἄς* は、*νά* 構文の小辞 *νά* と等価の働きをする。

6. 結語 — 現代ギリシア語の法の行方

さて、色々と例文などを比較しながら考察してきたが、現代ギリシア語の叙法はどのように分析できるであろうか。現代ギリシア語の接続法はどのように位置付けられなくてはならないか。まだまだ議論の余地は残っていそうである。

古典ギリシア語に於ける様な形態論的な面からの接続法を現代ギリシア語に望むのは、多少むりがあるとしても、ライトフット氏も論じている様に、確かに現代ギリシア語の統辞論的な *νά* 構文の接続法の用法は、古典語の接続法の用法をはば踏襲していると言える。ミランベル氏も、すでにその事には言及している。

それでは現代ギリシア語の接続法は、*νά* 構文だけかと言うと、そうではなかった。いく分古い言い回しに、あるいは単純な未来の想像とか仮定を表わす構文に、小辞 *νά* を伴わない単独の動詞形が、接続法として認められた (cf. 3. 2, 4.)。しかし、それはかなり限られた用法で、非常に文語的であったり、逆に非常に口語的であったりする。一般的には、色々な例でも見てきた様に、現代ギリシア語の接続法を担っているのは *νά* 構文による接続法であろう。特に現在時称では、直説法と接続法を分つ要素は *νά* 構文以外に形態論的には見当らず、現今のディモティキでは、音韻的にも正書法上でも、動詞の語尾変化による直説法と接続法の違いはもはや無くなり、直説法の動詞変化形と小辞 *νά* との組み合わせにより接続法が形成されている (cf. 3. 1.)。アオリスト形に於いても、一応接続法の語形変化が直説法のそれと区別できはしたもの、小辞 *νά* を機能辞とし、分析的な形態の法の色彩が濃くなっている。

上記の資料だけで歴史的にギリシア語の変遷を云々するのは危険であるが、法に関して言えば、古典ギリシア語には存在した希求法・不定法は、形態論的な面からは、現代ギリシア語から姿を消してしまい、命令法に関しても第一・三人称が消滅し、また、禁止などの命令法も、*νᾱ* 構文の接続法に取って代られている。禁止の場合に限らず、現今では、命令法の代りに *νᾱ* 構文の接続法が好んで使われる傾向にある。中・受動相の場合は特にそうである。又、小辞 *νᾱ* を伴わない接続法独自の形も認められるには認められたが、*νᾱ* 構文の接続法の方がはるかに優勢である。分詞についても一言付け加えておくと、その用法、形態とも、全く後退してしまっている。又、直説法の未来形も、動詞形に機能辞 *θα* を附加しないと形成されない。

この様に見てくると、ギリシア語は、動詞の形態に関して言えば、古来総合的であったものが後退し、分析的なものになってきた。まだまだ保守的であろうとする動きと、分析的なものになろうとする動きとが同居しているのが現代ギリシア語の現状であろう。しかし、この言語の接続法も、やがては完全に分析的なものに変化していくのではなかろうか。

参 考 文 献

D. W. Lightfoot - Principles of Diachronic Syntax. Cambridge Univ. Press., 1979

A. Mirambel - Négation et mode en Grec Moderne.

Γ. Μπαμπινιώτου - Π. Κοντού - Συγχρονική Γραμματική της Κοινής Νέας Ἑλληνικῆς, Ἀθήναι, 1967.

A. A. Τζαρτζάνου - Νεοελληνική Σύνταξις, Ἀθήναι, Α' 1946, Β' 1963.

☆ ☆ ☆

Bυ. = Βυζαντινὸς ὀρθρος. Διηγήματα Ζ. Παπαντωνίου. 1936.

Ε. = Ἑκλογαὶ ἀπὸ τὰ τραγούδια τοῦ Ἑλληνικοῦ λαοῦ. Ν. Γ. Πολίτου, Ἀθήναι, 1914.

Ζ.Π. = Ζαχαρία Α. Παπαντωνίου. Διηγήματα. Ἀθήνα, 1927.

Καζαντζ. = Ν. Καζαντζάκης.

Λ. = Λαογραφία. Δελτίον τῆς Ἑλληνικῆς Λαογραφικῆς Ἑταιρείας.

ΜΒ. = Μαρίας Μινώτου. Παραμύθια ἀπὸ τῇ Ζάκυνθο. Θεσσαλονίκη, 1937.

Μπ. = Ὁ Μπαμπινιώτης, ἦτοι διηγήσεις Ἀγωνιστοῦ. Γ. Δροσίνη. Ἀθήναι, 1924.

Πα. = Παλιὰς ἀγάπες. Διηγήματα Α. Καρκαβίτσα. «Ἑστίας», Ἀθήναι, 1919.

Σεφέρ. = Γιώργος Σεφέρης. Ποιήματα. 1 Στροφή. Μυθιστόρημα. Ἡ Στέρνα. Γυμνοπαδιά. Ἀθήνα, 1940.

Τρ. = Α. Κ. Τραυλαντώνης. Λεηλασία μὲς ζωῆς. Μυθιστόρημα. «Νέα Ἑστία», Ἀθήναι, 1936.

Τζαρ. = Α. Α. Τζαρτζάνος. Νεοελληνική Σύνταξις, Ἀθήναι, Α' 1946.